

玉泉寺南三里澗下多深紅
躑躅繁艷殊常感惜題詩以
示遊者

玉泉南澗花奇恠不似花叢似火
堆今日多情唯我到每年無故為
誰開寧辭辛苦行三里更與留連
飲兩盃猶有一般孤負事不持歌
舞管絃未

早夏遊平原迴

夏早日初長南風草木香肩輿頗
辛穩澗路甚清涼巖巖行看抹青
梅旋摘著瘳飢餐解渴一盞冷雲
漿

宿天竺寺迴

野寺經三宿都城復一還家仍念
嬌嫁身尚繫官班蕭洒秋臨水沈
吟晚下山長閑猶未得逐日且偷
閑

侍中晉公欲到東洛先蒙書

問期宿龍門思往感今輒獻
長句

昔蒙興化池頭送今許龍門潭上
期聚散但愁長見念榮枯安敢道
相思切成名遂未雖久雲卧山遊
去未遑開說風情與筋力只如初
破蔡州時

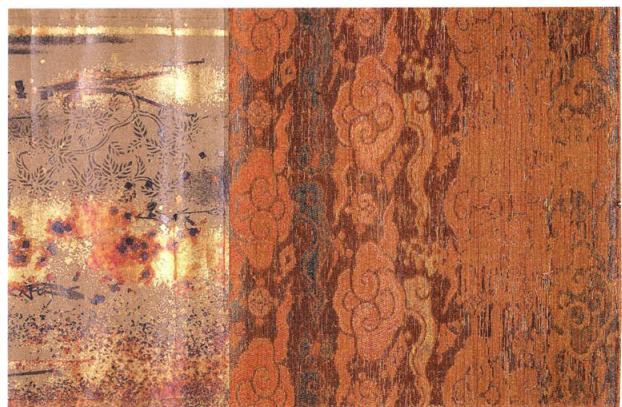
家熙翻刻文



内箱



内箱内部



表紙

一、名品の仕立て

18 「玉泉帖」付属品

家熙翻刻文、卷子表紙、内箱

三点

「玉泉帖」は、『白氏文章』巻64の四首の詩篇を、平安時代の能筆で、三跡の一人として名高い小野道風(八九四〜九六六)によって書かれたもの。明治十一年に近衛家から献上された名品の一つである。

卷子の表紙裂は茶地瑞雲文繡珍。絵緯に紅、白、緑、黄、そして銀糸を用い、大きな雲の間に七宝や丁子などを表した、いわゆる瑞雲文で、中国からの舶載品と考えられる。その裏の見返しには、型によるかと考えられる牡丹唐草、萩(か?)、小笹、蝶が、金銀泥の霞と大きささまざまな形の箔の間に見え隠れするかのよう配されている。また本紙裏打ち紙には、桐や菊などの植物が唐草文風にアレンジされた文様に、金銀の大小様々な形の箔が自由に散らされている。軸は堅木に透漆を施し、梅、鳥、蝶を螺鈿で装飾したものである。

収納箱は四重であるが、卷子が直接取められる内箱は、表面は唐木の木肌をいかに仕上げ、蓋・身共に内側は黒漆地に蝶と鳥の蒔絵で装飾される。両側面には、菱形唐草文の繊細な紐通し金具があらわれている。

本品には、家熙にとされる翻刻文も付属しており、家熙の本品への関心の高さが示されている。また、これらの仕立ては、いずれも家熙によるものと考えられ、名品に相応しい格のある仕立てには、家熙の本品に対する鑑識の深さと、敬愛の念が窺える。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近衛家熙 ― 風雅の探究

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 25

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成十三年七月七日発行

©2001, Museum of the Imperial Collections